

俺、死神になります。

更級牙依

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

理不尽な交通事故で死んでしまった本作の主人公、神崎悟（かんざきさとる）が死神の力で変態達を駆逐します。オリ主は男（重要）

尚、私は原作を読んでいます。この作品では一部一部省略されている部分があります。

この作品ではクロスオーバー、TSなどが含まれています。

それらが苦手な方はご遠慮ください。初投稿なので下手糞です。

不定期更新です

追記

残酷な描写、アンチ・ヘイトは保険
タグは増えます（予定）

目次

俺、驚きます／邂逅

73

俺、転生します／運命 | 1

俺、戦います／初陣 | 8

俺達、戦ったあと。／日常 | 18

「俺」の過去／誰かの平和 | 23

俺、悩みます。／理不尽な青 | 28

俺、困惑します。／化け物の正体とは？ | 35

俺、発見します。／もう一人の転生者 | 41

「俺」のダチ？／黒の戦士 | 47

「俺」のダチ？／白の戦士 | 56

俺、すれ違います／下衆登場 | 64

俺、転生します／運命

俺はある時死んでしまったらしい。

なぜなら体の感覚がいきなり吹き飛び、気が付いたら一面が白、白だけの世界に俺はいる。

「はは、俺は死んでしまったのか。死んだ理由も分からないで。気が付いたら死んでいたなんて……。こんな人の死に方じゃねえよ……」

なんて思っていたら、なんと表現すればいいのだろうか。着物を着て猫耳をつけた女の子……。?がいた。

「お目覚めのようねえ」

となんかゆつたりとした口調で話しかけられた。

「おっしやる通り俺は目覚めました」

とりあえず答えてみた。まったく、何が起こっているのだろうか。

「貴方は死んだのよお?」ところで、どんな風に死んだか知りたい?」

この人はおそらく俺が死んだことを知っているらしい……。つて

「なんで俺が死んだことがわかるの?!まだ目覚めた、しか言つてませんよね?!」

なんなんだろうかこの人、人の心を読んだなんて・・・そんなことあああああり得ないいい。ということはこの人は人間じゃないのかな、なんてかなり焦って考えていた。

すると女の人はニヤニヤしながら

「そうよお。貴方の考える通り私は神様よお。それにしても貴方、凄く慌てようねえ。うふふふふ。まあ話をもどすね。死に方を知りたい？知りたくない？」

女の人は満面の笑みから真面目な顔になって話をすすめる。

「そりゃ、俺の死に方です。知りたいですよ」

いやそりゃねどんな死に方したのかなんて知りたいよ。だって気が付いたら死んでいたなんて。

「はいはい。じゃ、言うね。君はこちらのミスで死んでしまいました。そっちでいうと交通事故、車に轢かれたの」

軽く言いやがって、人の死をこんなにも軽く言うのか・・・。じゃなんでここにいるのだろうか？

「その答えは今言うわよお？それは貴方を死なせてしまったお詫びに貴方を転生させます。尚、どんな世界かはもう決まっているの。俺、ツインテールになります。という世界なの。勝手に決めてごめんさいねえ。いろいろ勝手に決めてしまって申し訳ない

から特別に何か欲しい特典とかある？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

というながーいことがあってやっと俺は転生をしたようだ。転生してから俺は身分の証明ができるやつを探した。一時間がたつてやっと自分の立場が分かった。

私立陽月学園高等部に入学する予定で・・・。

俺の名前は・・・。「神崎悟」か・・・。えーと前の名前が思い出せないな・・・。まあ、いいか原作知識あるし。

このケースはなんだろうか。

「なんだこれ、転生特典ってwwマジでくれたww」

一人で部屋にいるのに結構笑った。まあ後で必要になるから鞆に入れておこう。

いつ入学するのだろう・・・って!!!!

「今日入学じゃねえええかああああああ」

やばいやばいやばい準備しなきゃ・・・。

ささっと準備してダッシュして学校についた。入学式が終わり、HRが終わろうとしたとき部活にはいるかはいらぬか決めていたとき・・・。

観束総二なる男・・・いや観束総二が「ツインテール部」と書いたのだ。いくら原作

をしつていても直に聞くと嘖き出すでしょ。ふつう。

帰りの道、観東と帰ることになった。

「なあ、観東、お前ツインテール部って書いたけど、なんで？w w」

「あ、それあたしもききたい。ソーじ、なんで？流石にツインテール部はないと思っただけ」

俺と愛香は総二にニヤニヤしながらきいた。総二は焦りながら答えた。

「あ、焦ってたんだよ！無意識だったんだよ、そんなつもり全然なかったんだよ」

「無意識で出てたまるかこのツインテールバカ！」

「そ、そこまで言わなくても・・・」

にしても観東のツインテール好きっぷりは常人のそれじゃないなあ。あ、そうだ

「今から観東の家行っていい？午後暇なんよ」

「神崎さん、今日ソーじの家でご飯食べていったら？喫茶店だし。あたしは食べてくけど」

まあ。観東の家が喫茶店ってことも知ってるけど

「え、マジで？観東。じゃ、食っていくわ」

てな訳で観東の自宅こと、喫茶「アドレシエンツア」についた。

そこで遅めの昼食をとった。正直ただのカレーなのにとてつもなくて美味かった。

食後の雑談を楽しんでいるとき、いかにも怪しい奴がいた。

新聞を読み、ちらちらこちらを見てくる。怪しい。

「……。目合わせないようにしようぜ」

観東がそう言った瞬間。

「相席よろしいでしょうか？」

といったのは怪しい人。女性だった。あ、この人がトウアールか。

「待て待て待てえ！」

案の定愛香がツツコミをいれた。

「はい？」

と怪しい奴もといトウアールが笑った

「誰よ！あんた!？」

「お構いなく」

「かまうわよ！」

「こちらの方に用がありますので」

「俺!？」

観東は驚いている。まあ当然だろう、いきなり見知らぬ人に指名されるのだから。

「……で。俺達に何の用？」

「はい。貴方に大切な用です。ここで名乗っておきましょう。私はトウアールと申します」

「俺は観束総二だけど……」

「総二様？これを。なあにこれは怪しいものじゃありません」

と言つて、ブレスレット的なものを観束に押し付けるトウアールという少女。

「おのれが一番怪しいのよおおおおお！いい!?そーじ。絶対騙されちゃだめよ?」

愛香は懸命に観束を説得している。．．あ、俺完全に空気だわ．．．。

「……えくと……あ!えくと総二君?私よ?私」

「今時オレオレ詐欺かあ!」

流石に俺がツッコんだ。こんなわざとらしいものツッコまずにいられない。

「今私こまつてねー。だからこのブレスレットをつけて?」

トウアールつてこんなに演技下手なの?

「これをつけないと全世界からツインテールが消えてしますよ?」

．．．あ。こりや観束は反応するわ

「なんどうわつとえー……!?!」

「観束。まずは落ち着け」

「ツインテールがなくなるって聞いて落ち着いてられるか!しししし、しかも全世界か

らだぞ!？」

．．．あぁもうだめだ

「隙あり」

と、かなり素早く観東にブレスレットをつけた。

「これでこの世界は救われる。よかった」

俺、戦います／初陣

今回は観東がへんなブレスもといテイルブレスを「無理矢理」つけられて終わったよ。これでどうとう観東が戦う手段を手にしたよ。やったね（ry

「ちよつと！そーじ！それ外しなさいよ!」

「な・・なんだこれ!?!は・・外れない?」

「総二様、そのブレスはテイルブレスといつて後に使うことになる装備です」

と観東と愛香が混乱してるところにトウアールが冷静に説明していた。

「トウアールさんよ、まずそのテイルブレスについて具体的になんなのか観東に教えてやってくれよ。めっちゃ混乱してるからさ」とトウアールに促した。

「はい。ところで貴方は何者ですか？常人だったらここでは冷静にはいられないと思うのですが」

「うん？俺はただの高校生だが?」

「嘘・・・ですね。なぜ私の作った装備について知っているようなそぶりを見せるのでしようかね?」

「はあ……俺はただね……」

「ただ？」

「アニメの見すぎなだけだ」

ドガラガツシャーン

「「ええええええええええええええええええ!? ナンデ!?」」

観束、愛香、トウアールの三人が驚く。流星に「転生者」なんていつて変な目でみられるのもイヤだし。信じてもらえるわきやないし。まあそろそろ日が暮れてきたところなので俺は帰ろうと思う。

「そろそろ俺帰るわ。日も暮れてきたし」

「ん。じゃあな」

「また明日」

「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬ、凄く怪しい」

「トウアールさんよ、まあ近いうちに知るとおもうぞ?」

「「へ?」」

俺以外の三人が呆けているうちに観束の家を後にした。

俺は家に戻ってきたときに見つけたものがある。

一言でいえばバイクがあった。うん。言うのは簡単なんだよ。なんでこんな言い方するかって言うと……某仮面ドライバーに出てくる「死神」のバイクがあったことだ。

まあ俺の装備が「死神」関連だからかな？と思っていたら。それは神様からの贈り物だった。一応バイクの名前を入れとくけど、「ライドチエイサー」だ。

まあ、今日は遅いし、寝る。

翌朝

「やばいやばいやばい!!!寝坊しちゃった!!!ああああもう!ライドチエイサーに乗って学校いく!」

とまあ昨日のことなんだけどあまり眠れなかったorz

だから眠い。授業の三分の一程度寝て体力は回復した。そして観東の家に向かった。
ガチャ

「お?よ。観東」

「よう。悟」

「こんにちは、悟さん。ところで悟さんって女っぽい名前だね」

「うるせっ」

というな雑談をしていた。

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

「ん?」

なんか走ってきたな。トウアールかな?

「総二様! いきましよう!」

「は? え?」

「(ニヤリ) おーおー。俺も行くー」

「ちよつと!? ふたりとも!」

キュイイイイインンンンン

恐らく、これが瞬間移動とやらかな? 体が、心がびよんびよんするような感覚が…。

あ、俺は難民じゃないからね?

「ここは!」

「スタジアム!?! 結構遠いぞ?! 一瞬で着くなんて自分の意識を疑いたくなるぞ!」

観束と愛香が混乱していたがそれを粉☆砕することが起こった。

「この世界のツインテールを! 我々の手中に収めるのだー!」

「ちよつと、観束。なにやってんの!」

「ちよつと!?なんでそーじがあそこにいるのよ!？」

「お、おお落ち付け。愛香、悟。あれは俺じゃない!」

つとちよつとしたコントをやつてたらトウアールが真剣な顔つきで

「あれが敵、エレメリアンです。属性力を糧とする者です」

などと、「エレメリアン」について観束に説明している。

「・・・あれは・・・誰だ?」

どこかで見たことのあるような人がいた。

「あのツインテール!あれは会長!？」

「おい。ツインテールかよ」

俺と愛香はそろつてツッコんだ。

エレメリアンが「なんと麗しいツインテールだ。そのツインテール。頂く!」

と大きい(小並感)リングを出して会長に通した。すると、なんと・・・

会長のツインテールが解けてしまった。

「なんてことを・・・おのれエレメリアンめ・・・ゆ”る”さ”ん”」

「あああああ!会長のツインテールが!ツインテールがあ!」

俺は会長に手を出したことに怒っている。観束は・・・ツインテールが解けたことに

怒っている。

「トウアール！このプレスどう使えばいい！」

「ねえ！そーじ！正気!?こんなわけも「俺は真面目だ！」・・・デスヨネー」

「総二様。念じればいいのです。そうすれば、エレメリアンに唯一対抗できる武装、ティルギアが精製されます」

「そうか」

観束は走っていった。混乱したら負けだぞ？観束。

やがて観束は光に包まれて炎を連想させる「ティルギア」を着た・・・観束？もとい幼女がいた。・・・と混乱している。結構苦戦している。なんか隣で混沌（カオス）が起こっているが知らない（遠い目）

はあ・・・もういいかな。

「ちよつくら観束の手助け行ってくる」

「悟さん!?何ソレ!?!」

「悟様!?危ないですよ!?!」

「俺にも戦う備えはある」とブレイクガンナーを取り出し、マズルを押し、変身プロセスに入った。

Break up!

機械の鎧が纏わり、観束の救出に向かう。体が縮んだ感覚とともに。

「ああ！総二様！名前を決めてなかったんですね!？」

通信のヨウダ

総二は少し考えて、答えた。

「テイルレッド！」

「ほうテイルレッド・・か。では貴様。禍々しい見た目の戦士は何者だ!？」

あのーあんたに禍々しい言われたらオワリなんですけど。まあちよつとカツコつけよう。

「俺はテイルチェイサー。人間の守護者。または死神だ」

「ほう。テイルレッド！テイルチェイサー！行くぞ！」

「レッド！武器はあるか？」

「ある、さつき教えてもらった！」

「そうかじゃ、俺も」

Tune! chaser! bat!

「ちよつ！それかっこいいな！」

「いいだろ？」

「一気に決めてやる」

俺は必殺技のプロセスに移行する。そして。レッドは「オーラピラー！」と叫び、敵

を拘束した。

Excursion Full Break! Bat!

「ウイング! スナイパー!」

「グランドブレイザー!」

俺とレッドの攻撃がエレミアンを直撃し、粉碎した。

「ふふ! はははははははははは!」

「何がおかしい」

「二人のツインテールの戦士のツインテールに撫でられ朽ちる……これ以上の本懐はない!」

「勝手に変な幻想をみるなああああああ!」

俺達のツツコミ空しく。

「さらばだあああああああ!」

ドゴオオオオオオオオオ!

そして会長や皆にツインテールが戻っていった。

会長が目覚めた。

「あなた達は……?」

「俗にいう正義の味方ってやつさ。俺はテイルチェイサー。ツでこいつが」

「テイルレットだ」

「また逢えますか？」

「わからん。だが俺は人間を守る。とだけはいいておこう。レットはなんかある？」

「あなたがツインテールを愛するならまた逢えるよ」

「・・・そうですか」

「ではここらでお暇させていただくな、いこうかレット！」

「ああ！」

T u n e ! b a t !

「と、飛んだ!？」

「じゃあな」

俺達はそこをあとにした。

俺達、戦ったあと。／日常

あの戦いのあと、俺と総二は空を飛んで家に帰った。勿論、変身は解除した。(当然) まあ、よくあんな危ない(他意味)戦いに勝って、かつ生き残ったものだ。

そして、俺こと悟は基地(なのか?)につれていかれた。すごい(小並感)

.....

「あの一。悟様? さつき貴方が使ってた銃のようなアイテムをこちらに渡して頂けないでしょうか?」

トウアールは俺に頼み込んだ。だが、返事は勿論。

「断る。．．が、理由は言えない」

などと言ってはみたが、どうだろうか。

「いいえ。ここは引き下がれません! それは貴方の装備が、エレミアンに有効だった

ことですよ!」

嗚呼、ダメだこの痴女。なんで科学になるとこんな真面目になるかなあ。

などと、かれこれ1〜2時間も頼みこまれたら流石に降参だ。

「あああ！もう！わーた！わかった！渡すから！落ち着け！」

.....

.....という感じで解析が始まった、と思つたら。

「悟様、だめでした。この銃？はブラックボックスが多すぎます。」

と言つて、俺に返した。・・・あ。

「こいつの詳細を説明するよ。わかる範囲でね。こいつは、ブレイクガンナー。俺がテイルチェイサーへと変身するものだ。えっと、他のスペックは、これらを使つて」

と、言つてバイラルコアを出した。

「順に、バット、コブラ、スパイダー。これらは、俺の戦闘スタイルに合わせて使い分ける。・・・とこんなところかな」

俺除く三人が唾然としていた。・・・まあ当然だろう。よくわからない事を立て続けに

言われたのだから。あ、バイクについても言つておこう。

「あと、こいつが、ライドチェイサー。俺のバイク。以上。んじゃ帰る。じゃな」

と言つて。帰った。今日は眠れそうだ・・・戦つたし。

.....

朝だ。ぜんっぜん眠れなかった。ヌアズエダア!

今日も、不完全燃焼だ。まったくちくせう。

なんだろうか。今日はいつにもまして。騒がしい。全校集会?今更?

タツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツタツ

俺は走った。だつて時計見たら8:10なんだもん。ヤツベエ

まあ。何とかまにあつたが。朝から集会とかだるい。寝るとしよう。

・・・と寝ようとしたその時。

「私は、昨日、怪物に襲われてしまいました!」

会長が高らかに報告した。そして「な、なんだつて!」「そんな奴〇してやる」

などと、周りがうるさい。そして。追撃に。

「そんな時、二人の華麗な戦士に救われたのです!」

「!!」「おおおおおおおおおおお!!」「!!」「!!」

「んあああああああああああああああああ!」

「アイエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!」

俺と総二は歓声、ではなく悲鳴に似た何かを叫んでいた。

・・・だつて。大きな大きなスクリーンに・・・

テイルレット(総二)とテイルチエイサー(俺)が映ってたんだもん。

「彼女達はテイルレット、テイルチェイサーという者がということが判明いたしました。

私たちは。彼女たちの援助をすることになりました！」

俺はその先を覚えていない。理由は、卒倒して気絶したらしかった。いや、むしろ気絶

したほうがよかつたのかもしれない。あの全校集会のあと凄かつたらしい。それは、レットか、チェイサー。どっち派？とかいうものになっちまったらしい。

まあそんなことスルーして帰り道に行こうとしたら・

「我の名は、ドラグギルデイ、エレメリアンだ。なに、心配することは無い。そなた等人間の心の結晶である、属性力を我らに渡してくればそれで良い。命の保証をしよう。ただ、最近是我らに歯向かう者が出たらしいが、無駄な抵抗だと言っておこう。以上だ」

なんだ・・・今の演説？は・・・脳内に直接きたような。

「総二、今の聞こえたか？」

「ああ。聞こえた」

「愛香さんは聞こえた？」

「ええ。変な演説だったわね」

トウアールには・・・聞かないでもないか。

「トウアール。あいつは日本語話せるの？」

俺は疑問になったので聞いてみた。

「いいえ。あれは恐らく、全世界に発信してたため、それぞれの語系に対応するために脳に直接送ったのではないかと」

・・・とトウアールが愛香と総二に諸々説明している。このように、俺はどうとう命を

かけて戦うのか。今になって怖くなっている・・・いや、これは興奮だ。

所謂俺は戦闘狂みたいだ。

俺は家に帰ったあと、ライドチエイサー、ブレイクガンナーの点検をした後、寝た。

t o b e c o n t i n u e d . . .

「俺」の過去／誰かの平和

俺は原作で言う1話に当たる部分で戦った。そして今。夢を見ている。これはどこかで見たとがあるような・・・無いような・・・。なんか悲しいような・・・。

「待ってよー！ー！」

少年が叫ぶ。そして。

「やだよー！ー！」

少女たちが叫ぶ。これは所謂鬼ごっこなのだろう。そしておそらく少年が鬼をやつて追いかけているところなのだろう。そんな俺はというと、なぜか三人称視点から少女たちの戯れを見守っているのだ。体を確認しようとする。

・・・なんと

(俺の体がない!?)

なんとということだ。俺は実体をもつてないようなのだ。そして誰が遊んでいるのか名前くらいは聞こうと思ったのだが。あいにくと

「——ちゃん！まってよおー！」

「へっへーん！追いついてみなよ！」

「——はおっそいねえ！」

「う、うるさい！」

などと名前だけは聞こえないのである。こいつらは姉妹なのだろうか？いやその様子はないだろう。かなり親しくしているがおそらく幼馴染、というものなのだろう。

だが仮にこんなものが俺の記憶（幼少時代）だとはありえない。しかも俺は転生者であるが故に幼少時代は現実の世界であるはずだ。

だが、なんなのだろうか。何故か既視感があるのだ。懐かしくも感じる。まるで体が覚えているかのように。

「——ちゃんっつかまえた！」

「むう——！——がずるしたんだもん！」

「——ちゃん。落ち着きなよ、負けは負けなんだから」

などと。俺が考えているうちに少年が少年少女たちを全員捕まえたようだ。なんと平和なものだ。見守っていると俺にきずくことなく帰って行った。

……やっぱり俺はここにいない存在なのか。

そして視界が暗転した。

そこには……

プロトゼロがいた。なんとプロトゼロがさつき出ていた少年を……

無残に引き裂き。殺した。

俺は見てられなかった。しかし何もできなかった。俺はプロトゼロを憎みたかったが何故か憎めなかった。なぜなのだろうか。わからない。

そして俺は予想した。あの少年少女たちも無残にころされてしまうのか？

プロトゼロの行動は俺の予想を大きく上回った。

なぜなら……そのまま帰って行つたのだ。ますますプロトゼロのことが分からなくなってきた。

あの少年少女たちは泣いていた。そしてあまりの非情な現実気絶する者もいた。

あまりにも解せない。俺はあの子どもたちがかわいそうでならなかった。気にかけてやりたいくらいだ。だが何もできない俺の実状。

(くそ……ツツ！なんで!?!どうしてこんな気持ちにならなきゃいけないんだよ!?!こんな……あんまりだろ……)

そんな俺の気持ちを無視するように風が吹き、草が揺れ、小鳥が鳴く。現実はこの感覚に非情なのか？だが俺は怒ってはいえるものの、何故か冷静でいられる。そんな自分

がいらたらしい。自分のことをぶん殴ってやりたい。そんな腕も手もないが。

そして再び視界が暗転する・・・

パチ

俺は目が覚めた。目覚めは最悪ださつきのような悪夢は普通に怖い。机にはあいか
わらずブレイクガンナーが置いてある。なんの違和感もない。日常、なはずだ。

なぜかあの夢を見て以来違和感に襲われるようになったのだ。理由はわからない。
ただ。自分がなんなのか、であることだ。

「俺は一回死んでこの世界に転生して。チェイサーの力を得て。エレミアンと戦う、
戦士。で間違いはないよな？」

自問自答しても何も変わりもしないことは自分でもわかっている。唯、心を落ち着け
たいのだ。兎に角だ。今日は学校に行こう。まずはそれからだ。

話は変わるが登校にはライドチェイサーを使っている。許可はとつてある・・・らし
い

よくクラスメートに言われるのだ

「お前中二病かよ W W W W W」

「お前高2になつてそんなバイクか W W W W W」

ひどい言われようである。

授業は相変わらずよくわからん最近はずいぶんツイントイルズが話題になっているおかげであまり評定に影響がないようなのだ（そんなんでいいのか理事長）

学校が終わり、家に帰ると強烈に眠くなってきた。

それから先は覚えてない。おそらく気絶するように眠りこけていたのだろう。

一体俺は何なのだろうか？

は静かに近づき、上半身と下半身を真つ二つにした。案の定この少年と遊んでいたであろう友達（なのかな？）は、目をひんむいて気絶している。無理もない。こんなものを幼い子供が見たら当たり前か。これが絶望というものなのか。仲のいい友達が目の前で殺されたら誰だって怒るか、悲しむか、絶望するかだろう。．．．ただなんで同じ少年が殺される夢を見るのだろうか。

・・

パチ

「またあの夢か．．．．．あれ？俺．．．泣いているのか？あ、あれ？おかしい、な」
俺は、泣いていた。高一にもなつて情けなく思えたが今はそんなことどうでもいい。何故最近こんな夢を見るのか。俺は知りたい。だが．．．

「今は学校行かなきゃな。トゥアールに聞けば何かわかるかもしれないしな」
そして俺はいつも通り（バイクに乗って）学校に行く。．．え？当たり前じゃない？
きにするな！（キリッ

「あ、おはよう悟。遅かったな」

総二がいた。場所はいつものツインテール部の部室だ。今考えると部室が用意され

ただけでも凄いなあつて思ったりする。なんて思ってたら。

ブザーが鳴った。エレメリアンが出たのだ。

「!?でたか!悟。いくぞ!」

「・・・あ。お、おう!」

総二が率先して支度をする。そして・・・

「テイルオン!」という掛け声と

「・・・」

Break up!という電子音とともに変身が完了する。そしてワープする。

「レッド!ここは二手に分かれて各個撃破、というにはどう?」

「いいねえ!そうしよう」

と言つて俺たちは二手に分かれた。ちなみに俺は戦闘員を。レッドは親分をやる、そんなところだ。理由?・・・俺はボスと戦うのが、めんどいから、そして最近調子でないからでもある。変な夢見たからなのかなあ・・・

「ツフ!ハア!どわいしえええええ!」

俺はひたすら殴る。戦闘員にはこんな感じだろう。・・・しつかし多いなあ

「あああああ！面倒だ!!やっぱ使ってやる！」

俺はバイラルコアを取り出し・・・ブレイクガンナーに装填した

Tune!chaser...spider

俺の右腕に蜘蛛型の武装が装着されて必殺・・・

Excursion Full Break Spider!

紫色のエネルギーが電子音と共に圧縮、そして解放された

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

俺の雄叫びとともに。

場所が変わってレッドの戦い

「ふふふ、私はリボンに魅せられしもの、フォクスギルデイ。以後お見知りおきを、美しき女神よ」

「誰が覚えるか！」

「ふっ・・・可憐でありながら力強い見ただけで心がとろけますよ・・・」

なんかこいつ言ってることが気持ち悪いしなんか声優さん波にいい声なのが妙に腹立つ・・・。

「ああ・・貴女のツインテール・・なんて美しいのでしょうか・・決めた」

なんかフォクスギルデイがなんかし始めた。俺ねエレミアンって筋骨隆々ない
メージがあつただけどこいつはシャープでほかのとは何か違うって思った。属性力
によって見た目も変わるのかなあ・・なんて思っている

「!?なんだこれは!？」

リボン?なのかな・・変形していつて人型に・・つて。

「これ俺じゃねえか!」

なんと俺がいた。

「ふふふ、僭越ながら結ばせていただきました、まあ見た目だけです。唯の人形です
が。さあ、貴女にこのツインテールが攻撃できますか?」

「つく!卑怯だぞ!」

とりあえず反抗しようとするが・・くそ!俺にあのツインテールを攻撃するなん
てできない!

「ふふふ、テイルレッド・・今ここに封じたり」

と言った矢先。俺は何か拘束された。・・いわずもがな、リボンだが。

「んっ・・くそ・・」

こういう時に限って変な声が出てしまうのはどうにかならないのだろうか。・・俺

の負けか……

(そのとき、青い閃光が奔る)

「そ……レッド!大丈夫!」

なんとツインテールの青い戦士がいた。愛華だ。このツインテールは。そして俺を拘束しているリボンを槍で切った。

「な!?!貴女はテイルレッドの仲間なのですか?だが貴女にこの人形を攻撃でk」

フォクスギルデイが話してる途中なのに容赦なく俺の形(テイルレッド)の人形を破壊し始めている。

「あ、ああああああ貴女は仲間を攻撃するのですか!?!」

「?あれは人形だもの。破壊していいでしょ?じゃあ、とつとと終わらせるね」

愛華……テイルブルー(即興)は槍を構え、叫んだ。

「ウエイブランス!エクゼキュート……ウエーブ!!」

炎の力を解放し敵を切り付けるまたは薙ぎ払う、俺のブレイザーブレイドとは違う水の力を解放して一点集中型の槍を投げるエクゼキュートウエーブ。それは数々のテイルレッド人形を破壊しながらフォクスギルデイを貫き何も言わずに爆散した。

後日テイルブルーの戦い「だけ」みてたメデイアによるテイルブルーに対する批評は散々なものだったそうなの。

俺、困惑します。／化け物の正体とは？

最近俺は変な夢を見る。といつても「この悪夢」は今に始まったことではない。何故だ？何故、俺はこんな夢をみるようになってしまったのか。俺に少年少女達を襲うような趣味は持ち合わせていないし、ましてや「人」として惨い殺し方をするようなことはしない。(グロイのは好きだが)

夢を見るようになってから戦闘にも授業にも集中できないし・・・なんか変な気持ちだ。

・・・今日は学校休もう。

.....

周りがぼんやりとしている。俺は、「またか」と思った。：ていうかもつとマシな夢とかないのか？とマジで思ってたりする。だって毎回毎回化け物プロトゼロが数人の少年少女を襲い、中心であろう少年を惨く殺し、それで・・・おわり。

こんな夢を何回も見ている。刺激的な夢であるのだが、さすがに飽きる。こんな言い

方するのもあれであるのだが。ほらほら……また始まったよ……もうこんな見たくない……。

「——ちゃん！こつちだよ！」

「——くん！まつてよお！もお。——ちゃんは速いなあ」

「——はもつと頑張つて!!——くんにおいつけるよ！」

「ええええ!——、じつははやかったの!？」

「——くん！マツテエエエエエエエエエエ！」

「え？え？ええええ!？ちよ、——、そんなにはやかったの!？」

「いやああああああああああああああああw w w w w」

嗚呼。やつぱり子供があそんでいるつてほほえましいな。特にあの少年が少女に追いかけてられてマジになって逃げるところとかね。さつき数人つて思ったのだが3人だったのか……あれは所謂幼馴染つてやつなのかな？なんて思っていたら……

やつだ。

プロトゼロ
化け物が現れた。やはり毅然と、無表情にそして少しずつ三人に近づいて行った。そし

て二人の少女たちを「死なない程度」に殴り昏倒させた。・・・何故殺さない？そして少年は四肢を腕がれて下半身から少しづつ刻まれてそこには肉片だけになっていった。何故毎回ある少年を殺し少年以外には興味を持たないのか。何故少年を殺す？無残に、原形を残さないまでに。

俺は無性に気になる。では逆に何故「彼」なのだろうか？なにか理由でもあるのだろうか？ただ、殺す・・・そんなことはないはずだ。化け物でもプロトゼロなのだから。そもそもプロトゼロは人を殺すようなプログラムは組み込まれていないはずなのに・・・何故？

嗚呼。疑問だらけだ。

・・・とそんなところに化け物^{プロトゼロ}が「俺」を見た・・・？

いやいやいやいやいやいやおかしおかしい。そもそもこれは俺の夢だしかも前見た夢では俺は実体をもってないはずなのだ。そんな俺が何故見つめられているのか。前回の夢から名前がわからないのは変わらないのだが、場面が鮮明だ。あたかも俺自身ではなく「俺」が経験したかのように・・・

話を戻そう。化け物^{プロトゼロ}が俺を見つめたのだ。そしてそつと近づき少し口角を上げたように見えた。そして

「俺はお前だ。お前は俺だ」

冷たく無機質に俺に言い放った。・・・あの化け物が俺で俺がああな化け物？ふざけるな。そんなことがありえるか。俺は「人殺し」なんて絶対にしない。現実世界前世から誓っている。俺は神の不意のミスで死んでしまった。転生できる代わりに（変態と）戦う運命を背負ったが、俺はまた生を受けることができたのは変わりない。ただ・・・

「ふざけるな。俺はおまえのような化け物じゃねえんだよ！俺は人を殺したりなんて絶対にしない。俺は死神じゃない。正義の味方だ！」

俺は強く反論したのだがなんか釈然としない。何なのだろうか。この胸に引つかかのような違和感というものは。そして化け物プロトゼロは・・・

「・・・まだわからないのか。ツフ。まあいい。貴様みたいな思い上がりにはいい事を教えてやろう。正義なんてない。その理由はな、屑どもが掲げている正義など自己満足ではない。ではなぜ争いが起こるのか？・・・簡単なことさ。主張の違い、生きるためなんだよ。現に貴様が戦っているエレミアン。それらだつて属性力とやらのために貴様たちと戦っているのだろうか？それらは属性力を糧に生きている。この世界の原作知っているならわかることだろうか？」

．．．ド正論だ。的を射ていて。俺は確かに。とさえ思えた。俺は論破された。つてやつだ。だけどな．．．

「確かにそうかもしれない。だけど．．！誰かを護りたいって思うことが間違っているのか？混乱している世の中で誰が希望になればいいっていうんだ!?そしてあいにく俺は平和はこの手で勝ち取る主義だ。できるなら戦わずして共存したい。でも、そんなことは不可能ってわかった。理由は簡単だ。人間にとつて害悪なものだった．．それだけだ！現に襲われたところを見た．．．泣いている奴がいた．．俺はもう．．みんなの絶望してる顔、涙なんて見たくない！俺はその為に．．いや、俺は人間を“護る”ために戦う！」

これは俺の本心だ．．．

「ほお．．．ならばどこまで持つか．．．じっくりと拝見させてもらおう．．．」

．．．

目が覚めた。もう夜だ。何時間寝たのだろうか？

そしてテレビにはテイルブルーが批判されているニュースが流れていた。

って俺今回戦線に参加してねえじゃねえか
!!!!!!

俺、発見します。／もう一人の転生者

前回の俺、死神になります！

俺は毎晩同じ夢をみている。しかも同じ夢を毎回。「人殺し」の、だ。

拳句の果てには「俺はお前だ」．．．なんて言われる始末。

俺も俺でそれを否定したのだけど．．．．

さて今回は悪夢以外になにかおこるのか？

.....
side

俺はここに「転生」してきた。神様に「チエイサー」を援護しろ、なんて言われた。最初は「アホか」と思ったのだが．．．あいつが本当にいるのか？もし逢えるのなら．．．伝えたい。謝りたい。もし誰か違う奴に「転生」したとしても俺は構わない。「あの力」を使えるのは「あいつ」っていう唯一つの証拠なのだから。俺は神様から言われたことに疑問を持ったものがある。

「貴方の願いがかなうかもよ？」

なんて不気味な神なのだろうか。こんなの怖い通り越してキモイだよ。つかナチュラルに心を読まないでほしかった。マジでキモイから。俺は前世での装備を受け取った。装備は何かって？

ヒントは「バイク」「ベルト」だ。これでわかるだろ？

俺は行かなくてはならない……。「あいつ」に伝えそびれて……。今も後悔している。そして俺は「あいつ」に会わなくてはならない……。かつて俺のことを護って逝きやがった「ダチ」に……

だから待っていてくれ……。「チエイズ」……。

??? side out

神崎悟 side

最近俺は変な夢を見る……。「人殺し」をしたこと……。己の体が機械だったり……。「誰か」を護って死んだこと……。もしかして本当に化け物プロトゼロの言つてたことは本当なのか。

では「俺」って一体何者なんだ？ いや……。俺はつい最近この世界に転生してきたあの種の「イレギュラー」であるのは間違いない。

もし……。俺のせいでこの世界に異変が生じていたら……。どうしよう……。ほか

の世界と？^{アニメ}がってしまったたりして・・・それはそれでありなのだがそれも「変異」なのでよろしくはない。もしかしたら俺以外に転生者がいるかもしれない。同じ境遇だったら話しやすいのになあ・・・

つと。もう寝なければ。また悪夢でもみるのかな？

.....

「アハハハハハハ」

「たのしいね」

「そうだね」

相変わらずの平和な光景である。まだね・・・

まだこない・・・あの・・・^{プロトゼロ}化け物は・・・

「フフフ。こない・・・でも思ったのか？」

俺は不意に囁かれた。俺は「そいつ」に恐怖感を覚えた。・・・と？

バイクの音が聞こえる・・・。

なんと仮面ライダー・・・黒いドライブ？がやってきて。^{プロトゼロ}化け物に殴りかかった。そ

して黒いドライブはこう言った。

「なにを動揺している。なにに恐怖している？お前は人々を護る者だろう？仮にこいつ

がお前でもその志は変わらないのだろうか？」

励ましているつもりだろうか？……だけどこいつなら何か知っているかも……!?

「俺に聞いても答えることはできない……申し訳ないがな。ただ俺は伝える……いや励ますことしかできない。真実は自分で掴め……。過酷なものだが」

・・俺が質問する前に答えた。なんてこつたい。そして黒いドライブは^{プロトゼロ}化け物に必殺技を放つ……。

H i s a a a a a a t u !

F u u u l l T h r o o o o o t t l e !

S p e e d !!

黒いドライブは^{プロトゼロ}化け物にライダーキックを放った。一方放たれたプロトゼロは……

「そんな……仮面ライダー……ッ！何故貴様がここに!?ありえない……!」

と言葉を残し……「うわああああああああああ!!」

爆散した。一瞬の出来事だった。

プロトゼロが遺した言葉に答えるように黒いドライブは言った……。

「お前は俺の未練だからだ。お前を俺の手で消せば。未練が晴れるからだ。そして……」

黒いドライブは俺に向き直ってこう言った。

「ここからお前次第だ。お前に『これ』を託す」

黒いドライブは変身を解除してベルトを外し俺に渡した。何故、これ、という言葉で強調したのかは謎なのだが。俺はベルトを受け取った。黒いドライブは紫のライダージャケットを着た男だった。彼は微笑んでいた。その微笑みの中に少し哀愁をただよわせながら。そしてこう言った。

「俺の名はチェイス。かつて仮面ライダーとして人々を護り、仲間を護って死んだ……ロイミュードでもある。仮面ライダーの敵となったこともあった。だが、俺は最終的に自分の使命に気づいた。そして、その使命を果たして死んだ。悔いは……ただ、仲間から『ダチ』と呼んでほしかったことだな……このベルトには俺のすべてが詰まっている。あ……t……わ……の……だ……」

チェイスと名乗った男は消えた。俺は何者なのかはわからずじまいだったが。随分と心が軽くなった気がする。彼から受け取ったこのベルトを手にとると頭に記憶が流れてきた。これが彼……チェイスの記憶なのか……。始まりから終わりまで……。過酷だったのかな？ いや、人間として生きていた部分もあったのだから……楽しかったのか……。嗚呼。涙が……

「ありがとう……。チェイス……。俺を助けてくれて……」

俺は涙が混じって心からの感謝の言葉を贈った。今は亡きチェイスに……。

「俺」のダチ?／黒の戦士

前回の俺、死神になります。

俺は夢の中で化け物に子供達が「いつも通り」襲われる・・・かとおもったら仮面ライダープロトドライブが颯爽と現れて・・・手早く?瞬殺?という風に倒した。

倒した後、プロトドライブ 彼からベルトを託された。

よって俺はドライブへの変身能力を得た。そして「チェイス」と眩いたもう一人の転生者。現る。

.....
side

私は転生した。神から「チェイサー」を援護せよ、と頼まれて。なんか敵に変態がいるとか。私は丸腰でいるわけにはいかなのでドライバー一式は揃えたのだけど・・・。つてあれ?私?あれ?あれれ?本当は私じゃなくて俺なんだけど・・・。そして感じる違和感。ここはおそらく転生先で言う自宅・・・だよな?・・・妙にかわいい部屋なんだよなあ・・・。

「・・・ん?なんだろうこれ・・・生徒手帳?」

私：俺は……つてもういいや私で。私は生徒手帳を拾い、証明書のところを見た。……
 なんと。

身分証明書

国立音ノ木阪学院生徒no. 14567

1年1組13番

氏名 詩島 流華（しじま るか）

と、共にこの世のものとは思えないくらい的美少女が写っていた。（具体的には名存実望の神様みたいなルックス。体は本家よりちよつと大きい）

「なんじゃこりゃああ!?これが俺!?ありえねえ!つうか俺ってここでは流華っていうのか!?……れつきとした女子じゃねえか!ベルト……ベルト……あつた!よかつた……」
 絶賛混乱中な俺。本来の口調がでてるけどいいや表ではさすがに直す。……あ。学校行かなきゃ

???改め 流華side out

悟side

俺だ。今日は学校に行こうと思う。だつてさすがにやすみつぱなしはまずいじゃん?……と俺はライドチェイサーに跨り学校へ向かった。多少、俺を不思議な目で見

やつがいたが気にしない。

「おはよー」

俺は挨拶して入ったら……

「……………ああああああああああ……………」

クラスみんなが俺を見て驚いている。それもそうか、二週間近く行ってなかったもんね。それから今日は休憩時にめちやくちや質問された。

某刑事の言葉を借りよう。

「俺に質問するなあー！」

「……………ええええええ……………やだ……………」

「……………」

俺は思う。こここのクラスメートは実はとんでもない団結力をもっているなあ……と。言い忘れていたが俺は高2である。ただあのツインテール馬鹿東の情報がよく入ってくるだけだ。まあ……俺もあのツインテール馬鹿東のいるツインテール部総に所属してるのだけだ。理由は俺も戦うからだ。……テイルチエイサーとして……ッ！てなわけで俺は部屋にいる。総二によるとこここの生徒会長が黄の戦士となつたようだ。射撃てんこ盛りの援護重視らしい。真面目かと思つたのだが……アーマーを脱ぐ癖があるとか、体が急成長し犯罪チツクになるとか、露出狂……なんてレッテルを貼られている：

らしい。

「おい。悟、大丈夫なのか？」

総二が心配する。ホントこいついいやつ（ツインテール馬鹿だけど）

「ああ。大丈夫だ。新たな力も得たしな」

と、言つてドライブブースの形見^{チェイ}を出した。

「また私の知らない装備ですか・・・」

トウアールは警戒、興味、興奮など混じった目線を向ける。まあ、俺はある意味異邦人だから仕方ない。すると・・・。

まわりの動きが遅くなった

「な、なんだ!?!これ!?!」

「なによ!?!体が・・・」

「動かない!?!」

「時が止まったみたいですね・・・」

総二、愛華、生徒会長、トウアールが驚く。・・・まあ当たり前か。

「ここは俺に任せろ。人がいるからテイルチェイサーにはならんが」

「「!!」」」

俺はドライブドライバーを巻く。そしてシフトブレスを装着、イグニツションキーを捻り、黒いシフトカーを手に・・・

俺は宣言する。戦うために、護るために。

「変身！」

Drive Type speed!

黒い鎧を纏い変身プロセスを終了する。

「行ってくる」

と四人に伝え。俺は戦地へ向かう。四人は

「いってこい！」

「負けたら承知しないわよ！」

「かつこいい・・・」

「ええ。現状悟様しか戦えませんしね」

.....

俺はライドチェイサーに跨り向かう。この画こそ本来のヒーローである。人知れず

陰で平和を護る。そして戦地に到着した。蜘蛛を模した化け物がいた。今回はこいつが犯人だ。たしか・・・ロイミュード、っていったな。

「お前か、ロイミュード」

「なっ!? なんなんだ!? お前は!？」

「名乗る必要はない。これから倒す相手に」

「へっ、笑わせる」

とロイミュードが鼻で笑ったと同時に互いに詰め寄って肉弾戦を始める。俺はロイミュードを殴るのだが、あまり手ごたえを感じない。やはり、まだこの装備では下級ロイミュードが限界か。パワーが足りない。仕方ないブレイクガンナー普段使っている装備を使うとしよう。俺はブレイクガンナーを手に殴りかかった。

「フン!」

「ぐ・・・お前・・・なんだそりや・・・武器をつかうなんて・・・卑怯だぞ!」

「どうに腕を武器に変化させてるお前がいうものではないな」

「ぐ・・・黙れえええええええ!!!」

このロイミュードは俺に一方的に殴りかかった。さすがの俺も吹っ飛ばされる。こ
うなったら・・・やってやる・・・ッ!俺はイグニツションキーを捻りシフトプレスを
操作した。

s p s p s p e e e d !

電子音が鳴り響き数秒間だけであるが俺だけの空間が生まれる。その数秒で俺は駆け出し、拳を重ねる。．．．そう。ラッシュユってやつだ。

「うおおお．．．．．らあああああああああ!!」

「なんてスピードなんだ．．．！こいつには．．．勝てねえ．．．」

ロイミュードが驚き、怯える。飛んで逃げようとするが俺は逃がさない。逃がすわけもない。理由は簡単、人に害を及ぼした。それだけで十分な理由だ。

「決める．．．ッ!」

俺は再びイグニッションキーを捻りシフトブレスを操作した。さっきと異なる点はブーストイグナイターを押してからシフトカーを操作したことだ。よって．．．

H i s a a a a a a a a t s u

F u l l T h r o o o o o o o t t l e ! !

S p e e e e d !

電子音が響いた後．．．右足にエネルギーが溜まっていく．．．そして、上空へ俺も飛び空に飛んで逃げている俺の敵へ右足を向けて．．．解放する。

「ううおおおおおおおおおおおおあああああああああ!」

俺は雄叫びをあげた。紫色のエネルギーを纏って。そしてロイミュードは俺の放つ

テレビを見たところ・・・もうニュースになつていた・・・なにつて。俺がさつき戦つていたところをスキヤンダルされていた。はあ・・・マスコミ怖い。

ほかのやつは・・・つと・・・ん?音ノ木坂学院廃校の恐れ・・・?え?ここつてほかの世界と?がつてる感じ?・・・十中八九、俺・・・転生者のせいじゃん。もしかしたらほかの転生者と会えるかもしれない・・・という淡い期待もおこう。

悟 s i d e o u t

「俺」のダチ？／白の戦士

前回の俺、死神になります。剛が「詩島流華」として転生した。そして神崎悟が仮面ライダーに変身し、通常のロイミュードを辛くも葬った。

流華 side

ああ・・・なんでこうなったんだ・・・。どういうわけで俺は女になってしかも一年からやり直して。外にでたら口調は直すが一人の時は元の口調が良い。だって何が悲しくてダチが死んで挙句には俺が女に転生して。ホントにふざけんなって思う。しかも自分でいってなんだが、自分の見た目が「かなり可愛い」というものだ。何度でも言うがナルシストじゃあない。絶対に。しかし俺も男だ。・・・いろいろ確認したよ。それについては触れないでほしいが。

話を戻そう。俺は言われたのだ。「チエイサーを援護せよ」と。もしかしたら「あいつ」・・・いや「ダチ」がこの世界に来ている。と考えられる。俺はマツハで会いたいがこんな見た目で気づくはずもない。それは俺だつてわかっている。だからやることは決まってる。まずはこの世界に順応することだ。俺は先日入学式にいった。(実はあの生徒手帳はそのあとにもらったものだったことを忘れていた。)だが、音ノ木坂学院は「女

子高」だった。内心ドキドキが止まらなかった。顔を真っ赤にしていたかもしれない。まあ今日も学校に行くんだが。今日は自己紹介をする日だ。別に性格を偽るつもりもない。俺は俺だ。このモットーは変えるつもりはない。そろそろ準備しなければ。鞆にドライバー一式を詰め込んだ。異世界なので何が起こるかわからないためだ。音ノ木坂はバイク登校が許可されていた。俺は1年なのだが先公をにらんだら一発OKだった。なので俺は前前に、左世界世からの相棒、ライドマツハーに乗り登校する。秋葉原ってこんななにぎやかで楽しい街だったんだな、と思いつながら・・・音ノ木坂に着いた。いろいろな目線があるが、俺はそんな程度どうってことない。「ダチ」を喪った気持ちに比べればな・・・。

教室に入ったが、相変わらず女子しかいないのである。ああ・・・まともに人が見れない。ただ単純に恥ずかしい。コミュニケーション自体はむしろ得意だ。だから生活そのものは問題ない。ただ精神衛生上結構危ないのだ。元の世界に戻ってこの習慣が残ってたらもう社会的に死ぬ。まあそんなことを考えていたら俺の順番が来たようだ。見せてやる・・・俺のアメリカで鍛えたコミュニケーション能力を・・・ッ!

「みなさん、詩島流華です!得意なことはアクロバティックな動きです。宙返りは普通にできます!よろしく!」

やったぜ!完全勝利

そして今に至る。

運動神経が良いネコみたいな子、星空凜。声がきれいなおとなしい子、小泉花陽。凸凹コンビで良いダチだなあ。俺はそんなダチがいる二人がうらやましい。

「ダチか……」

俺は無意識に声に出していた。女子校でバリバリ男言葉を出したことにすぐ気づいた。

「流華……さん?」

とあるクラスメートが声をかけた。

「い、いや、なんでもないよ!?ちよつと独り言だよお」

我ながら気持ち悪い。これだけは姉ちゃんと進兄さんに見られたくない。もし見られたら死ぬ……いや恥か死ぬ。これは確実だ。

そんなこと考えながら帰宅した。お風呂とかは目隠しして入ってる。偶に変なところにあたって変な声が出るけど、人に言えるものではない。そして今日は疲れた、と思いながらベッドに入った。明日何も起こらなきやいいんだけどなあ……。

次の日

昨日と同様にバイクを走らせ登校する。ぶつちやけ勉強はできる。ほぼ授業は作業

だった。そして放課後。時が来た。

「流華ちゃん！きたにやー！」

「・・・で。宙返りの勝負？」

「そうにや！どつちの身体能力が高いか勝負だにやー！」

「凜ちゃん、頑張つて！」

「ハハハ・・・。お手柔らかに」

このとき凜は知らなかった。流華という少女（？）は只者ではない。そして手を抜いても楽勝に勝てる、と思っていた。

「凜、じゃあ・・・いくね？」

「いよいよ」

俺・・・いきまーす。俺は側転宙返り3回半捻りをやった。これくらいかつて戦つてたしわけもない。凜と花陽がおどろいていた。凜に至つては目をまるくして、花陽に至つては気絶している。

「そ、そこまで凄いことしたかな？」

純粹な疑問だった。

「だ・・・だめにや、流華ちゃんの技を超えることはできないにや・・・凜の負けにや・・・」

「ええ・・・(困惑)」

簡単に負けを認めちゃったよこの子。

.....
帰り際、負けた凜のおごりであーめんを食いに行った。とても旨かった！帰路についてると・・・異形の気配がした。何とも言えない寒気を感じさせる。まさかロイミュード？そんなわけがない。ロイミュードは俺と進兄さん、そして犠牲になったけどチェイスの三人で撲滅・・・いや、倒したのだ。ではなんだ？近づいてくる・・・？

俺は咄嗟に後ろに飛びマツハドライバーを腰に巻いた。パネルを上げシグナルバイク・・・シグナルバイクを装填した。

(シグナルバイク！)

(ライダー！)

(マツハ！)

(♪♪♪)

軽快な音楽とともに鎧が装着されたが違和感があった。肌が(少ないけど)露出しているのだ。そして・・・髪型がツインテールに結ばれている。

「え？なんで!?!なんでだよ!?!」

「おお・・・新しいツインテイルズだ・・・」

怪物がなんか言ってる。寒気の正体がわかった気がする。こいつ「変態」だ。こいつ

はマツハで倒そう、そうしよう。

「追跡！撲滅！いづれもく？マツハ！仮面ライダー・・・マツハ！」

「何言ってるんだ？」

「名乗りだよ！それくらいわかれ！」

「では俺も名乗ろう。ブルマ属性のエレメリアン、タトルギルデイだ！」

「気持ち悪い、さっさと消えろ」

俺はもう気持ち悪くてさっさと帰りたいかった。必殺技のプロセスに入った。パネルを上げイグナイターを押し、戻す。

（ヒツサツ！フルスロットル！マツハ！）

「ち、ちよつとまで!?まだちゃんとお前のブルマの確認を・・・」

「知るか、気持ち悪い」

「え？ちよ・・・」

「さっさと消えろおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

右足にエネルギーが収束し、臨海に達したら変態タトルギルデイに向かつて解放する。

タトルギルデイは甲羅で防ごうとしたが、その右足は甲羅を貫き、直撃し、爆散した。俺は変身解除した。

（オツカーレ）

俺は家に帰り気絶するように眠りについた。

流華 side out

この白い戦士が顕現し、エレメリアンを倒したとツインテイルズに知られるのはまだちよつと先のことである。

俺、すれ違います／下衆登場

前回までの俺、死神になります。

秋葉原で異形が現れたらしいのだが、謎の白い戦士が駆逐したらしいのだった。なんでも目撃者によると、派手な口上、ゴツイが軽快なサウンドのベルト、白い鎧、金髪美少女。もういろいろぶっ飛びすぎてわからない。いつか会ってみたいな。

.....

悟Side

俺たちは学校ツインテール部の部室で話題がアキバに現れた戦士についてで持ち切りだった。まあぶっちゃけそう遠くないしそのうち会えるのではなからうか、なんて思う。すると総二

が
「アキバに現れた戦士ってよく言うけど味方なのかな？ 女の子らしいけど」

それは思う。確かに正体不明（こちらも言えた義理ではないが）な奴が味方だとは信じ難い。そしてトウアールが口を出す。

「秋葉原に現れた戦士についてですが、悟様。あなたに心当たりがあるかもしれません。」

これを」

スクリーンに現れたのは、白い……仮面ライダー……？少女？……ベルト……？……！

「これは……マツハドライダー？！なんでそんなものがここにあるんだ！」俺は驚いた。

「やはり……ご存じでしたね」トウアールは何か悟ったように俺を見つめた。トウアールが続けて「悟様の装備一式を解析いたしますので私にわたしてくれませんか？」

やはりこう来たか。こういうわれたらこう言うしかないよなあ。

「……条件がある。」

「なんででしょうか？」

「解析しても悪用するな」

「わ、わわ分かっていますよ……」

「わ　か　つ　た　な？」

「は……はい」

悟side out

総二side

Type Speed!

俺、愛華、慧理那の三人は光に包まれてテイルギアを、悟は黒い鎧を纏った。

総二side out

悟side

俺は黒き戦士「仮面ライダープロトドライブ」に変身し、総二たちはツインテイルズとなつたようだ。俺は素早くバイクに跨り現場に向かう。ツインテイルズゲートを使うようだ。理由は簡単。「今」はツインテイルズではないことだ。

俺は時々思う。俺が戦う目的ってなんだ？と。この世界を守るため？まだはつきりしない。このもやもやがトライブシステムに影響しているのかもしれない。．．．なんて考えていたら現場についた。すでにツインテイルズは交戦しているようだ。俺もすぐに向かうとしよう。

「また貴様らか．．．ロイミュード」

「．．．バンノ様の為、貴様らを殺す」

「バンノ．．．だど？」

「お前．．．ナンバーはないのか？」

「．．．なんだそれは」

「なるほど・・・まあ良い」

ここにいるロイミュードはおそらくバンノが駒として造った人形だろう。それにしてもナンバーを持たないロイミュード・・・未来の技術でも使っているのだろうか。俺は疑問に思いつつ交戦を始めた。

流華 side

俺は凜ちゃんの花陽ちゃんの三人で帰路についていた。最近現れた異形がニユースになっていった。俺が戦っていることもニユースを見てやつと理解できた。ニユースに「テイル Cheney」という戦士？女の子？がいたのだ。 Cheney の雰囲気を感じたのだが他人の雰囲気も感じた。もしかしたら・・・あいつがいきいているのだろうか。いや、あいつは死んだ。俺を護るために・・・自爆して・・・。ではこの「 Cheney 」はなんだ？本当にあいつだろうか？俺としては生きていてほしい。もしかしたら死んでから転生したのかも・・・

「流華ちゃん？」花陽ちゃんが声をかける。

「ふえ!?!ん・・・な、なにかな？」おもわず変な声が出てしまった。

「流華ちゃん！今日もラーメン食べにいくにゃ〜！」今日もラーメンか・・・まあ、

Rider!

March!

「Let, s...変身!」

軽快な音楽とともに白い鎧を纏い。敵のもとへ駆け出し...

「追跡!撲滅!いずれもく?マツハ!仮面ライダー?マツハ!」

流華 side out

悟とツインテイルズは予期せぬ乱入者に驚いていた。戦う前に話題になっていた、白き戦士が...否、仮面ライダーマツハが現れたのだ。そしてその中でただ一人様子の異なるものがあった。

それは...悟だった。

『少々形が違うが...その名乗り方は...剛か!』

明らかに悟の声ではなかった。低く、頼れるような、誇り高き戦士の声だった。

「...え?ち...チェイス!?!どうしたこの姿は...弱体化してるじゃないか!」

『今は訳があつて現在の状態を話すことができない。後で必ず話す。今は力を貸してくれないか?』

「...もちろんだ!一緒に戦おう!」

白き戦士「マツハ」と黒き戦士「プロトドライブ」は昔に会ったことがあるのか、と

思うくらいにコンビネーションだった。お互いの弱点を補い合って、死角がない。流華・・・剛は喜んでいた。「ダチ」と再び話し、会うことができている。それはチェイスも同じことだった。過去に「ダチ」であったことを否定されていたことが嘘のように。そして・・・

『決めるぞ！剛！』

「OK！」

チェイスは必殺技の構えをとった。チェイスはイグニッションキーを捻りシフトブレスを操作した。続けてブーストイグナイターを押してからシフトカーを操作した。

H i s a a a a a a a a t s u

F u l l T h r o o o o o o o t t l e !!

S p e e e e e d !

剛も必殺技のプロセスに入った。パネルを上げイグナイターを押!!、戻す。

(ヒッサツ！フルスロットル！マッハ！)

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおの!!!!!!』

二人の熱い友情のライダーキック。それは想定されていた威力の数倍にまで跳ね上がり、ナンバーのないロイミュードを塵も残さず破壊した。!!!!!!

「やったな！チェイス！」剛はダチ・・・チェイスに声をかけるが・・・。

『剛、今は限、界の、よう、だ。今、強いて、言える、こと、は身体、を借りている、ことだ……』

「なんだって!?! どういうことなんだ!?!」

『今、は訳が、あるんだ……あと、でかなr……ず……』

プロトドライブは倒れた。剛は確信していた。彼……チエイスは生きていた……。ここでも人間たちの守護者として。だから……

「わかったよ。チエイス。また後でな。またな……」剛は泣いていた……。今は女子の身だが。剛……流華は変身を解き、避難所Ⅱ音の木坂学院に向かった。花陽と凜が待っている。

その後……

悟はトウアールによるメデイカルチェックを受け、異常なしと言われたが、白き戦士を見たときの境に記憶がないことがただ……きがかりだった。

s

そしてあいかわらず^{ツインテール部}学校の部室では混沌^{カオス}が繰り広げられていたの言うまでもない。

俺はメデイカルルームを出た。俺はミーティングルームに入った。そこでは……。愛華が四つん這いになっていた。……泣いてる？

「ああ……」

どうみても愛華は絶望している。

「どうしたの？」

俺は訊くが、トゥアールが

「悟様、ご存知ですか？ 女子は常に胸で価値が決まるのです（キリツ）」

「なにいつてんのこいつ」

「俺にきくなよ……」

トゥアールが熱弁しているのだが俺と総二は聞き流した。

「トゥアール、解析の結果は？」

「はい、結果を言いますと……分かりませんでした。ブラックボックスが多すぎて……悟様の変身システムそのものがよくわかりません。これは私の予想ですがテイルギアに似たシステムなのではないか。と思っっています」

「凄いな、わからないのに予測はできるのか」

「私はこれでもテイルギアの開発者ですからね！」

トゥアールは大きい胸を張った。見た目が良いのに性格が酷いと何も感じなくなる

のは本当のようだ。

「悟・・・様ア？何か失礼なことを考えてませんでしたか？」

ナチュラルに心を読まないで欲しいものだ。

「そんなこと言ってる奴ほど意識してるんだよ変態痴女め」

言い返しはしたが・・・女の人って怖いわ。とりあえず聞くことは訊こう。

「なんで愛華が絶望してるんだ？」

その時、愛華が物凄い勢いで振り向いた。・・・愛華の泣き顔を初めて見た。トウアー

ルがニヤニヤしながら説明した。

「新型のギアを開発したんです。それも巨乳属性ラーツバストとツインテール属性のハイブリッド

の。それを愛華さんが欲しがって試しに使ってみたのですが何の反応もなかったの

すよ」

「愛華・・・気にしていたのか・・・その、胸のこと」

「・・・ドンマイ」

総二、俺の順になんとか励まそうとするが・・・

「ううううううううさいい！あんたたち男にぬあにがわかるってんのよ！」

「お、おい。悟これまじだぞ（ヒソヒソ）」

「総二、こ、こは放っておいたほうが・・・（ヒソヒソ）」

ヴァーヴー

エレメリアンが現れたのだろうか、サイレンが鳴った。．．．ここは。

「俺が行ってくる。総二は愛華の面倒見てて」

「お、おう。一人で大丈夫か？」

「問題ない。ただのパトロールさ」

「気をつけろよ？」

「解っているさ。．．．ッ！」

俺はブレイクガンナーのノズルを押し当て、エネルギーをチャージ。ロック調の待機音が流れ、解放した。

Break up!

電子音声と共に俺はテイルチェイサーへの変身を完了した。俺はワープ装置を使い現場に向かった。

悟side out

.....

流華 side

俺は凜、花陽と昼食をとっていた。

「凜ちゃん、今日は、このスクールアイドルがね！すごいんだよ！」

「今日もかよちゃんはすごいにゃー」

「あ、あはは」

今日も平和な一日である。

「あ！流華ちゃんつてさあ。好きな人とかいるの？」

「え!？」

「花陽も気になります！」

嗚呼。どうしよう。俺、体は女子でも心は男だからなあ。

「え？好きな人？」

とぼけてみる。

「だって、流華ちゃんたまあに遠くを見てるんからきになるにゃあ」

「(やばい・・・チエイスのことだ) 私は昔、友達がいてね。もう死んじやつて・・・」

「・・・ごめん。聞いちゃいけないことだった？」

凜が申し訳なさそうな顔をするが、この世界でチエイスが生きているかもしれないのだ。話の方向を変えよう。

「大丈夫だつて！気にしないで！．．．ところでさ。おすすめのラーメン屋ある？」
 「流華ちゃんつて優しいんだね」

「別に大したことじゃないよ花陽ちゃん。過去の話をしたら暗くなるだけだから」
 ちよつと照れる。だつてここの生徒みんなかわいいから。俺の精神が危ない。

「キャーーーーー！！！」

悲鳴が聞こえた。俺は向かおうとするが流石に人が多すぎる。凜、花陽も近くに
 いる。俺は何もできない．．．っ！

流華 side out

悟 side

俺はワープをし、ついたのは学校だつた．．．ここどこかで見ただことあるような気が
 する。まあ、俺はエレミアンをやるだけだ。

「イエエエエ〜イ！空前絶後ノオ！超絶怒涛のエレミアン！スク水を愛し、スク水に
 愛された男オオオオオオオオオ！そう、我こそワア！エレミアン、タイガ：：ポゴン：
 ギルデイ．．．イエエエエ〜イ！スク水！」

(うわぁ・・・気持ち悪い)

「・・・で何。あんたはスク水が好きなの？馬鹿じゃないの？」

「なんだと!? 貴様、スク水を馬鹿にするのか!？」

「違う。季節外れ。まだ春だから」

「・・・なんだと!？」

「てなわけで、始めるからね」Tune chaser Bat!! Execution

Full Break Bat!

「ちよつと待て!? マテマテマテマテマテマテマテ・・・」

俺は敵の言葉を最後まで聞かずに必殺技のプロセスに入り、空に飛び上がり、右足にエネルギーを溜める。臨界に達したと共に解放。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

雄たけびと共に。

「そ、そんな馬鹿な・・・この俺が季節を間違えた挙句にスク水を拝めずに終わるのか・・・ちくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

「ナニコレ、死ぬことより、スク水かよ」

戦い終わったので飛んで帰ろうと思った矢先。

「凜ちゃん、花陽ちゃん。ちょっとお手洗い、行つてくるね」

「はいい」

俺は走つた。ダチが（ある意味）ピンチだからだ。そして、違う覚悟を決めていた。

「Let's 変身！」

（シグナルバイク！ライダー！マッハ！）

軽快なサウンドと共に変身し終わった俺は早速チエイサーのもとへ向かった。そして……

「そ、そこまでよー！」

ザワ……ザワ……ザワワワ

「その子はさっきの、化け物をやっつける力を持った。私の大切な仲間なの！だから……乱暴はやめて？（上目遣い）」

これが俺の覚悟だ。男としてなにか捨てた気がしなくもないがこのくらい。チエイサーの為ならやってやるわ。

「……………ンマー……………」

女子生徒はどうとう（可愛さのあまり）気絶した。そして素早くチエイサーを連れ出した。

「……………までくれば……大丈夫かな？」

「・・・ん」

「お目覚めかい？チエイサー」

「どこでその名前!？」

「俺は詩島 流華、またの名をマツハ」

「俺も名乗るよ。俺は神崎 悟、またの名をチエイサー。詩島ってことは・・・剛って人

の・・・」

「・・・!？そつちこそどこでその名前を」

「俺はチエイスの力を借り受けて戦っているんだよ。そして時たま記憶が入ってくるんだ」

「なるほど・・・悟、でいいか？」

「おう。流華？剛？どつち？」

「二人だけの時は剛で良いよ。人が多いときは流華で」

「了解した」

「・・・チエイスににてんなあ」

「なにか言った？」

「なんでもないよ。さあ、早く帰りな。いつあの女子どもが来るかわからねえ」

「すまない。この恩は必ず」

「じゃあな」

俺たちは別れを告げ、各々の方向に帰った。待たせていた二人に散々怒られたのは後
の話。

流華 s i d e o u t

悟 s i d e

俺はすぐに機械の翼を広げ、飛び立った。数分で帰還した。しかし、驚いたことに、生
徒会長がいた。

「なんでこんなところに生徒会長がいるんだ!?!」

T o b e c o n t i n u e d